韓流の受容とブーム

―中高年女性と大学生の観点から―

金 恵 媛*

目　次

1. 韓流ブームから韓流へ
2. 「冬ソナ」と純愛ブーム
3. 中高年女性のファン行動についての大学生の認識
　3-1 調査の概要
　3-2 調査の結果
　　3-2-1 中高年女性のファン行動について―肯定的な面
　　3-2-2 中高年女性のファン行動について―否定的な面
　　3-2-3 大学生と韓流ブーム ―「あなたは、いま、韓流ブーム？」
4. おわりに

1. 韓流ブームから韓流へ

『冬のソナタ』1)の放映を機に始まった日本の韓流ブームは、2004～2005年をピークにしだいに落ち着いてきたように思われる2)。ワイドショーや女性週刊誌などにおける異常なまで

＊山口県立大学　准教授、地域文化研究

1)本稿では、作品名としては『冬のソナタ』、ブーム現象を指すことばとしては「冬ソナ」と表記する。

2)韓流という用語は、主に中国や台湾などの地域で観察された韓国の大衆文化を楽しむ社会現象を指す言葉として、中国メディアによって2000年2月頃、初めて用いられた。以降、日本やアメリカなどへの地域の拡大とともにジャンルの拡大もみられ、現在は、「韓国ではやっているエンタテインメント」という狭義の意味から「韓国」あるいは「韓国文化」そのものを意味する用語へと、幅広い概念に変わってきている（채지영외（2005a）,3頁）。例えば、「＜時時刻刻＞少子化対策韓流の挑戦」（『朝日新聞』2006年8月13日付）、「韓流おにぎり」（安瀬, 2005）、「＜奇想遺産＞韓国昌徳宮の軒下に込められた『韓流』の美」（『朝日新聞』2006年11月2日付）などで韓流は、韓国の大衆文化ではなく韓国、韓国文化という意味で用いられている。

www.kci.go.kr

の報道ぶりもなくなり、一時期のような熱気はもはや観察されなくなった。書店に特設されていた韓流コーナーも徐々に姿を消し、アジア作品の棚に「華流」と一緒に並べられるようになった3)。

しかしこれは韓流への関心そのものがなくなったことを意味するものではない。韓流作品及び韓流スターについての関心は依然として高い。まさに、「ヨン様」ブーム、「冬ソナ」ブームの「インフルエンザの高熱が下がって、微熱」に落ち着いた段階に似た状況である4)。ブームの沈静とともに、韓国に対する人々の関心も多様な領域に広がってきた。それに合わせて、提供される情報も多種多様に変わってきている。テレビドラマや映画だけを取り上げても、ブーム期は特定の俳優の情報が中心であったが、最近は、多様なジャンルの作品、関係者の紹介がなされている。そして、観光や韓国語学習、その他の文化商品についての情報も多様な観点から、より精査された形で提供されている。日本において、日常的に韓国に接する環境が整ってきたのであり、韓流は、もはや、珍しさからアクセスする対象ではなくなったといえよう。「一過性のブームに過ぎない」「ブームで終わってしまわないように」という批判や危惧のなかで展開されてきた韓流は、「日本の新聞やテレビに、キムやイやパクなどといった隣国の人名が頻出しても、誰も不思議には思わない」ほど5)、日本社会のなかに組み込まれているのである。

ところで、日本における韓流ブームは、若年層を中心にブームが広がった中国や台湾などとは異なり、ブームの主な担い手が中高年女性であるところに特徴がある。そして、中高年女性が流行の中核に位置するということは、これまでになかった社会現象である。韓流ブームを取り上げるワイドショーや週刊誌などのメディアでも、当然のことながら、彼女らのファン行動について熱心に報道してきた。流行現象における中高年女性の顕在化は、日本社会に、韓国大衆文化の日本到来に対する驚きとほぼ同レベルの衝撃を与えたのである。

本稿では、このような状況を踏まえて、日本でなぜ「冬ソナ」ブームが起きたのか、中高年女性の熱狂的なファン行動は、若者にどのように映ったのか、この2点について考察する。具体的には、日本の純愛ブームと韓流ブームとの関係、中高年女性のファン行動に関する大学生の認識についての分析を試みる。研究の方法としては、文献研究とともに、筆者が大学生を対象に実施したアンケート調査を使用する。

---

3)台湾ドラマ『流星花園（花より男子）』から始まった「華流（ファーリュー）」ブームは、中国、香港、台湾など中国語圏における大衆娯楽文化の流行を指すものとして、2005年の初め頃から、メディア関係者が韓流に対応する言葉として用いたとみられる（「ウィキペディア（Wikipedia）」）。ファン層が若い世代であり、地方局を中心に静かなブームを起こしていることが特徴とされており（三島，2005）、NHKの仕掛けで、主に中高年層の間で盛り上がった韓流ブームとは対照的である。

4)NHK編成局ソフト開発センターの小川純子氏は、ブーム時のような熱気がなくなったのは、韓流が定着しつつあるからだと指摘する（桑畑，2007）。

5)小倉（2007）。

www.kci.go.kr

2. 「冬ソナ」と純愛ブーム

韓日交流を語る際しばしば指摘されることは、「韓国人は日本が嫌いかも知れないが、日本人は韓国に無関心」だということである。これは、韓日関係が、つい最近まで、政治や経済、歴史問題など、主に公的関係のなかで語られてきたことに起因していよう。強制占領や経済格差などからくる差別意識やマイナスイメージ、さらには大衆文化伝播の流れからして、日本人が、韓国に関心をもつきっかけは、韓国人が日本に注目する機会に比べ、相対的に少なかったかもしれない。私的領域に位置することの多い中高年女性にいたっては、なおさらであろう。

韓日交流の状況に大きな変化がみられたのは、ソウルオリンピックが開催された1988年である。日本のテレビカメラが韓国の街を映し出し、女性の海外旅行ブームと相まって韓国を訪れる日本人観光客も増加した。内閣府が1978年以降毎年実施している「外交に関する世論調査」においても、日本人が韓国に「親しみを感じる」の割合が、この年初めて50％を超えたのである6)。しかしながらソウル五輪の熱気はすぐに終息してしまい、「親しみを感じる」の割合も翌1989年には40.2％に急低下した。それからの約10年間は、35.8％～43.1％の低い水準が続き、ソウル五輪前の状況に戻ってしまった。オリンピックの熱気がそのまま交流へと結びつくほどの基盤が両国の間に形成されていなかったのであろう。また、韓国で、1989年にようやく海外旅行が完全に自由化されたことも一因として考えられる。つまり、日本人が日常生活のなかで、韓国から来た留学生や旅行者など、いわば普通の韓国人に接する機会がほとんどない時代が長く続いたのである。

ソウル五輪時のこのような経験から、近年の韓流ブームに対しても、一過性のブームに過ぎないのでは、と懐疑的な見解を示す人は少なくなかった。次の四方田氏の言葉からは、従来から韓日関係に携わってきた人々が韓流ブームに抱く戸惑い、危惧がうかがえる。

> 昔から韓国関係のことをやっている人たちは、実は今のような韓流ブームについて懐疑的だったんですね。1988年にソウルでオリンピックがあって、みんなが韓国、韓国と騒いでいるときも、このオリンピックが終わったらまた元のマイナーに戻っちゃうんだ、と自分にいい聞かせていたし、2002年のワールドカップの頃も、サッカーが終わったらまた元に戻るんだよと。（李・四方田 21頁）

日本大衆文化開放政策の段階的な実施、サッカーW杯の共催など、公的レベルにお

6)韓国に「親しみを感じる」の割合は、調査開始以来40％前後の水準に留まっていたが、1988年に初めて50.9％を記録し、「親しみを感じない」（42.9％）を上回った。しかし、1989年には再び「親しみを感じない」の方が高くなり、以来、1999年に「親しみを感じる」（48.3％）と「親しみを感じない」（46.9％）とが逆転するまでこの状況は継続する（内閣府「2005年 外交に関する世論調査」）。

www.kci.go.kr

いて交流ムードが高まっていくなか、韓日交流の新次元を切り開いたのは『シュリ』と『フレンズ』である。2000年に公開された『シュリ』は、作品性においても高評を得たが、商業的にも成功した作品として、日本での韓国映画ブームの始まりとなった7)。また、サッカーW杯の共催を契機に様々な韓日交流行事が企画されるなか、映画やテレビ番組の共同制作も試みられた。なかでも人気が高かった作品は、日本のTBSと韓国のMBCが共同制作した『フレンズ』である。現在20～30歳代の韓流ファンのなかには、2002年2月に放映された『フレンズ』を見て、主人公を演じたウォンビンが好きになり、韓流に目覚めたという人が少なくない8)。この二つの作品は、韓国映画やドラマが普通の、いわゆる外国作品の一つとして一般に認知されるきっかけとなった作品として位置づけられる。

『冬のソナタ』は、このように、韓国に対するイメージが少しずつ好転する状況のなかで、日本に紹介された。そして、「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームが巻き起こり、想像を超える規模の韓流ブームへと発展していった9)。一大社会現象にまでなった韓流ブームは、韓日関係の変化や中高年女性の顕在化という点から特に注目された。韓国の大衆文化を日本が輸入するという状況に戸惑いを覚え、中高年女性ファンの熱狂ぶりに懸念を示す意見ももちろんあった。しかし、「革命的な意識変化」であり10)、「日韓の文化の時差がなくなってきた」と11)、韓流ブームを歓迎、評価する意見が圧倒的に多かった。事実、韓流ブーム後の分かりやすい変化としてよく挙げられていることは、身近なところで韓流にアクセスできるようになった、ということである。このような見解は次節の大学生の意見のなかでもみられたが、韓流に関する認識の改善や韓流の定着は、「冬ソナ」ブームが韓流ブームへ、韓流ブームが韓日交流へと発展していく一連の過程を通して得られた貴重な収穫である。

---

7)『シュリ』は2000年1月22日の東京公開（5館）を皮切りに、全国で約70館にまで拡大上映された。最終的には130万人の観客を動員、18億5000万円の興行収入を記録した（채지영(2005a), 7頁）。『シュリ』を観たある女性（46歳の大学教員）は、『シュリ』に感動したあまり、8回も映画館に足を運び、それから韓国語学習を始めたという（「声」『朝日新聞』2002年5月12日付）。

8)日本では2002年2月4～5日、韓国では同15～16日に放映された。日本では、主演のウォンビンに注目が集まり、K-POPに親しんでいた若い人たちがいっそう韓流にハマるきっかけとなった。一方の韓国では、地上波テレビで日本語がそのまま放送されたことに議論が盛り上がり（『동아일보』2002年2月18日付）、韓日交流の背景にある複雑な現実をうかがわせた。

9)NHK放送文化研究所が、2004年9月1日～10日に、全国の15～79歳の男女2200人（有効数1289人）を対象に実施した調査によると、「2004年9月現在、『冬のソナタ』という韓国のドラマが日本でも放送されていることを知っている人」は全体の90％であり、実際にこのドラマを見たことがある人は全体の38％であった（三矢, 13～14頁）。そして、2004年の韓流商品の売り上げの構成比をみると、総額184億円のうち『冬のソナタ』関連は83.9億円で全体の45.5％を占めている。(채지영외(2005b), 9頁)。

10)小此木は、「日本人が韓国のものを対等のものとみなし、それにあこがれのような感情を抱くのは、江戸時代の朝鮮通信使以来、実に百数十年ぶりのことである」、と韓流ブームの意義を述べている（小此木, 37頁）。

11)「窓・論説委員室から」『朝日新聞』（2004年4月19日付夕刊）。

www.kci.go.kr

「（1980年頃までは）韓国映画って劇場では見られなかった（中略）ビデオを誰かに借りて観るくらいで。レンタル・ビデオ屋で借りようと思っても、「韓国エロス」というコーナーしかなかったんだから（中略）今やTSUTAYAに（中略）韓国映画・ドラマという棚が四つぐらいありますから、時代は変わったなあ、と」（李・四方田，21頁）。

ではなぜ『冬のソナタ』が韓流ブームの起爆剤となったのであろうか。『冬のソナタ』の前後に多くの韓国ドラマが日本に紹介されたが12)、「冬ソナ」ブームのような社会現象を作り出すことはなかった。「冬ソナ」ブームの背景としては、NHKを初めとするマスコミによる宣伝、低コスト高品質、映像コンテンツ需要の増大といったドラマの外的要因と一緒に、映像、音楽、俳優、そしてストーリーなど、作品そのものについての支持も高い。そこで、実際の視聴者が挙げる『冬のソナタ』の魅力をNHKの調査から見てみると、「ストーリー」63％、「音楽」51％、「俳優」50％、「登場人物」27％、「映像」26％、「台詞」21％の順に続き13)、ストーリーへの支持がもっとも高い。

ストーリーの良さを指摘する声は他の調査などでも多くみられるが、とりわけ、中高年世代に青春時代を思い出させる懐かしさや、純粋さ、清潔さなどが高い支持を得ている14)。「ヨン様」ファンの中には、「『冬ソナ』の時の『ヨン様』」だけが好き、という人が少なくない。つまり、困難を乗り越え、純愛、初恋を貫く『冬のソナタ』の主人公を演じた「ヨン様」が好きということである。俳優と作品のなかでの役柄とを同一視する、いわばドラマを自己流に消費している例として考えられるが、ここから『冬のソナタ』が日本の韓流ブームの起爆剤となった背景をうかがうことができる。

『冬のソナタ』が一大旋風を巻き起こした2004年頃、日本は純愛ブームの時代であった。2004年のユーキャン流行語大賞トップテンには、「冬ソナ」とともに「セカチュー」がランクインしている。「セカチュー」は、2001年4月に初版8000部からスタートした『世界の中心で、愛をさけぶ』（小学館）の略称である15)。2003年に100万部のベストセラーとなり、2004年に映画化、テレビドラマ化を果たし、「セカチュー」ブームはさらに広がった。2004年12月現在、320万部以上を販売し、国内小説のなかで最大発行部数を記録した。さらに、2004年12月、インターネット掲示板「２ちゃんねる」では、同じく純愛を描い

12)『冬のソナタ』の放映以降、NHKや民放において多くの韓流ドラマが放映されていることは周知の事実であるが、『冬のソナタ』が放映される前にも日本に紹介された作品がある。たとえば、1996年10月に、福岡の民放テレビ局であるTXN九州（現TVQ九州放送）が、開局5周年を記念し、MBC「ミニシリーズ」ドラマを3作品(『ザ・パイロット』、『華麗なる休暇』、『ジェラシー』の順)を放映し人気を得たが、全国規模に広がるまでにはいたらなかった（채지영외(2005a),6頁)及び「ウィキペディア（Wikipedia）」。

13)三矢，15頁。

14)女性ファンからの支持はもちろんであるが（中沢,43頁、井原(2004a),21頁）、男性のなかにも、ドラマの中の「ユジン」に純粋さを感じ、ファンになったという人が多い（井原(2004b),76頁）。

15)「ウィキペディア（Wikipedia）」。

www.kci.go.kr

た物語『電車男』が爆発的な人気を集めていた16)。10月には単行本が発行され、2005年6月までに100万部以上の売り上げを記録した。『世界の中心で、愛をさけぶ』同様、『電車男』も映画化され、200万人以上の観客を動員し、その後舞台化されている。

あごひげアザラシの「タマちゃん」が流行語となり、SMAPの歌「世界に一つだけの花」が人気を得た2002年頃から『世界の中心で、愛をさけぶ』、『電車男』、『冬のソナタ』を経て、天国にいる大切な人への思いを歌った歌「千の風になって」が人気を得た2006年に至るまで、日本では「純愛」、「癒し」が求められていたようだ。「冬ソナ」ブームは、このような日本の時代状況のなかで生まれた社会現象である。若い世代が「セカチュー」、『電車男』に夢中になったのと同じように、中高年世代は「冬ソナ」「ヨン様」にハマっていたのではなかろうか。

では、『冬のソナタ』の中の純愛とは何だろうか。主演のペ・ヨンジュンの言葉を待つまでもなく17)、高校時代の初恋、様々なハードルをも乗り越え初恋を守り通そうとする主人公、家族で一緒にみられる清潔さなど、『冬のソナタ』については、純愛願望を満たしてくれる多くの魅力が語られている。ドラマ放映後、NHKに送られた視聴者からの手紙を例に、『冬のソナタ』のなかの純愛を見てみよう。

> 「在宅介護をして26年になる私の生活に、過ぎ去りしのひとときを思い起こし、ドラマのなかに流れる美しい音楽に感動の日を過ごさせてもらっています」（53歳、女性）（高野・山登, 19頁）

> 「初恋、片思いもあった若いころが美しくよみがえり、私も元気でいたいと思う今日このごろ。自分が遠い昔に体験したのは―。やはり思いどおりにならなかったことや、いまだにあの人はどうしているかな…とか、鮮明に覚えています。胸がキューンとしてくるから不思議です。主人がいて子どもがいて、幸せを感じていながら、初恋の思いは別だな…と悪びれもせずあつかましく恋しい感じがしています」（60歳、女性）（高野・山登, 19頁）

中高年女性にとって『冬のソナタ』の純愛は、現実の困難を忘れさせるファンタジーであり、一方では現在の幸せを確認し、安心するための手段でもある。非現実世界における物語は、現実世界のそれとは比較にならないほど積極的に読み替えられる18)。純愛がテー

16)「ウィキペディア（Wikipedia）」。
17)『冬のソナタ』のテーマである初恋について、ペ・ヨンジュンは、「『冬のソナタ』は、人々が忘れていた、または忘れて暮らしている、純粋さ、ひたむきな愛、情熱をもう一度呼び起こした」と述べている（高野・山登, 17　18頁）。
18)大須は、「冬ソナ」ブームについて、「見ている側がヒロイン、ユジンにすり替わる」というより「見ている者が自らの中にルーツを見出すような、もっと広範な、もっとダイナミック、根源的とでもいっていいようなものであろう」と、「自発的に判断停止」状態にある中高年女性が自ら進んでドラマの仮想世界を楽し

www.kci.go.kr

マとなるとその傾向はいっそう強化されよう。現在の生活を侵害しない範囲内で、思い出のなか、あるいは想像のなかで純愛の世界を膨らませていくのである。若年世代のブーム現象とは比較にならないほどの熱気で韓流ブームが盛り上がった背景のひとつは、このような中高年女性に特徴的な文化受容態度と、純愛というテーマにあったのではなかろうか。

映画やテレビドラマを見る目的の一つは、「非日常性」を味わうところにあるが、それは純愛の特徴と重なるところがある。大平健は、純愛とは、現実とは異なる自分の世界を描くための道具である、と純愛の概念を説明する19)。これは小倉紀蔵が語る「恨・ハン」の概念、すなわち「自分のいるべき場所にいることができないもどかしさ」と相通じる側面がある。『冬のソナタ』の流行は、中高年女性の日常からの離脱願望を充足させたことが背景となっていると考えられる。言い換えると、時代の要請ともいうべき純愛がドラマを説明するキーワードであり、それをなじみの薄い外国人俳優ペ・ヨンジュンが演じたことによって「非日常性」がいっそう強くなったところに20)、「冬ソナ」「ヨン様」ブームの原因を求めるべきであろう。

> 夕方の民方ニュースに映っていた彼を見て「すてきな人だなあ」と。日本人と欧米のハーフかなにかで、どこかの国で活躍していて来日したのかと思ったら、韓国の人気俳優と言われて、「えっ？」と思って（40代専業主婦）21)。

> 俳優って「身近な存在」より、「夢を見させてくれる」というのが仕事でしょう。そういう意味ですごく徹底している（40代企業研修、就職アドバイザー）22)。

「ヨン様」が外国人であることの他に、ドラマに見られる韓国人の生活様式や家族模様などからも、非日常を楽しむことができた。それは、ファンの異文化についての知的好奇心を誘発し、ブームの波及効果をさらに増大させた23)。そして、彼女らが知的好奇心を満たし、それをファン行動に反映させていく上で、インターネット環境の整備が大きく貢献したことを忘れてはならない。韓流についての情報の検索または提供を容易にした上に、ファン同士の仲間グループの形成を通してファン行動における連帯感をも共有できるようにしたのであ

んだ結果であると説明する（大須，89-90頁）。

19)권연수，368-369頁 。

20)ピョン・ヒゼは、外国ドラマの場合、自国のドラマに比べ、現実とドラマを比較する必要性が相対的に減少、視聴者は気楽にファンタジーに没入できるとし、そこに『冬のソナタ』の人気の一因があると指摘する（변희재，83頁）。

21)『論座』（2005年11月号），215頁。

22)『論座』（2005年11月号），217頁。

23)毛利は、中高年女性ファンは、メディアからの情報を積極的に読み替え、書き換えたりしながら、自分の文化を形成している複雑な存在であるとし、韓流ファンの中高年女性が能動的な文化消費をしていることを指摘している（毛利，17頁）。

www.kci.go.kr

る24)。また、日常的な付き合いを必ずしも必要としない集団への所属、言い換えると、ネット上で形成されるファン同士の仲間グループに加入し、活動することは、彼女らの非日常的楽しみを増大させる働きもしたのであろう。

以上、『冬のソナタ』が韓流ブームの起爆剤となった背景要因を、日本の純愛ブームとの関係からみてきた。初恋ストーリー、その純愛を際立たせる映像や音楽、俳優などの周辺装置とが一つになった作品として、日本の純愛ブームに合致した作品であったこと、そして、ドラマを積極的に消費する中高年女性がブームの主役であったことが、「冬ソナ」ブームという社会現象を生み出す背景となっている。言い換えると、純愛を求めるという当時の流行を、中高年女性は『冬のソナタ』を通して満喫したのであり、その結果として、「冬ソナ」・「ヨン様」ブームが生まれたのである。

3. 中高年女性のファン行動についての大学生の認識

日本での韓流ブームは、2つの面で大きな注目を集めた。一つは、大衆文化の伝播が日本から韓国へという一方通行から双方向へと変わったこと、いまひとつは、流行現象における中高年女性の顕在化である。前節においても確認したが、中高年女性は、若者とともに日本の純愛ブームの一角を担ってきたのであり、彼女らの積極的なファン活動により韓流ブームはいっそうの広がりをみせたものと認識する。そこで本節では、中高年女性ファンの子世代に当たる大学生たちが、中高年女性のファン行動及び韓流ブームについてどのような認識を持っているのかを、次のアンケート調査（自由記述式）から考察していく。

なお、この調査は、調査対象者数が42名と少なく、そのほとんどが女子学生である。また、韓国に興味を持っていると思われる集団特性もあり、調査の結果を一般化することは困難である。このような限界はあるものの、自由記述式の回答には韓流ブームや中高年世代についての若い世代の認識がよく表れており、韓流ブーム、異世代間関係を理解する手がかりの一つとして有意義であると考える。

3－1　調査の概要

①調査日時：2005年6月24日

②調査対象：山口県立大学の「韓国社会論」受講者42名（男性5名、女性37名）

24)事実、「冬ソナ」ブームの初期段階では、ペ・ヨンジュンという俳優に関する情報が日本にはほとんどなく、情報を得るためにインターネットを初めて使い、さらにはファン仲間に向けての情報提供へと、ネットを活用するようになったファンが少なくない。また、「シティーオブヨンジュン」（www.youngjunie.net）の管理人は、もしインターネットという空間がなかったら、ドラマの終了とともに、「冬のソナタ」への思いもマイ・ブームで終わってしまったであろう指摘する（李根美, 315頁）。

www.kci.go.kr

③調査項目：

ⅰ）中高年女性の韓流ブームをどう思いますか？（肯定的な面、否定的な面）

ⅱ）あなたは、いま、韓流ブームですか？

3－2　調査の結果

調査の結果をまとめてみると、韓流ブーム及び中高年女性のファン行動については肯定的な意見が予想以上に多かった。中高年女性のファン行動を過熱、異常と批判しながらも、積極的でいきいきとしている、両国の文化交流を促進させるきっかけとなった、と一定の評価を与えている。つぎに、現在、自分が韓流ブームか否かについては、否定の方が圧倒的に多かったが、その背景として、韓流を楽しむことと、韓流ブームであることを明確に区分している様子が伺えた。この項目についての記述には、大学生の韓流ブーム、ブーム一般についての考え方がよく表れており、興味深い。以下、各項目別に主な回答をみていくが、回答者の属性については（学年、性別）を明記する。なお、［　］内は筆者による補足である。

3－2－1　中高年女性のファン行動について―肯定的な面

記述内容のうち肯定的な評価をみると、世代、韓日交流、個の尊重、経済効果といった多様な側面に触れている。まずは、日本で韓流ブームという社会現象が生まれ、それを中高年女性がリードしていることについての認識である。回答者の多くは、韓流ブームを、韓国や韓国文化を深く知る良い契機として捉えている（18名）。文化交流が即韓日関係の改善をもたらすという発想というより、互いを知っていく過程、つまり異文化理解の過程として重きをおいている印象を受ける。さらに、中高年層は外国、とりわけ韓国をはじめとするアジアの国々にあまり関心がない世代である、という認識も垣間見られる。

「中高年世代の人にとって、これまで他の国（特にアジア各国）にはどちらかというとマイナスのイメージや偏見があったと思う。それが『韓流ブーム』によって韓国の人の生活を知り、興味を持つようになり、より近い存在に感じられるようになったのでは（中略）多くの人が韓国だけでなく世界に目を向けるきっかけになったら良いと思う」（4年生、女性）

「他国の文化が流行するというのは異文化交流への大きな第一歩という感じ。これからもどんどん日本に入ってくればいい」（2年生、女性）

「韓国にはとても興味深い文化が他にもたくさんあるということを知るきっかけに『韓流ブーム』がなればいい」（2年生、女性）

「政治とかより身近なことの方が人を動かす」（4年生、女性）

www.kci.go.kr

「在日朝鮮人をあまりよく思わない人が多いであろう世代で、『韓流ブーム』は、社会的にも経済的にも良いと思う」（4年生、男性）

もちろんなかには、これまでの韓日関係の負の部分を意識した意見もあった（5名）。ブームの効果で、政治や歴史問題などハードルの多い韓日関係の改善がみられるのでは、という期待を寄せる意見がそれらである。

「日韓外交でいまだに壁がある中で、昔、戦時支配をしていた日本の方から心を開いて交流しようとすることはすばらしいこと」（3年生、女性）

「草の根レベルの交流が促され、国民同士の理解は深まりつつあるところだと思う」（3年生、女性）

つぎに、中高年女性のファン行動についての意見をみよう。熱狂ぶりへの批判と同じくらい、中高年層の積極的な意思表示と捉え、肯定的に受け止めている人が多い（14名）。なかには、積極的なファン行動が話題になったことで、社会成員としての中高年層の存在に気づかされたという記述もあった。日本社会において中高年女性がいかに周辺的な存在であったかを考えさせる記述であり、中高年世代に与えた韓流インパクトの大きさを再確認させる内容でもある。

「中高年にも元気や力があることがわかった」（2年生、女性）

「特に夢中になるものがなかったおばさま達が、ヨン様に夢中になることで、人生にうるおいを取り戻せたのではないか」（2年生、女性）

「とくにハマっているもののなかった母が生き生きしている」（3年生、女性）

「スターを追いかけることによって若者には負けないとするパワーが伝わってくる（中略）日本の中高年層の人たちの熱心な心や気持を理解することができるならば我々若者にとってもいい影響を与えてくれるのではないだろうか。一つのことに夢中になってぼっとうするということはとても大切なこと」（3年生、女性）

「夢や目的（ファンになる、調べる、韓国に行く）を見つけて生き生きともっと元気になっているようにみえるのがうれしい。中高年のパワーはすごい！と思う」（2年生、女性）

www.kci.go.kr

さらには、中高年、母親、主婦などといった年齢や役割などを意識せず、個人の趣味活動として中高年女性のファン行動を捉え、それを尊重する意見もみられた（8名）。この意見は、ある韓流ファンの「娘よオバサン世代だって、すばらしいドラマには涙するものなんですよ！」（愛知県主婦（56歳））25)、という訴えにも通じるものがある。

「人生を楽しめている証拠だからよい」（2年生、女性）

「常に刺激があることは良い事」（4年生、男性）

「その人自身が生き生きできて良い。何に興味を持ち、それにどれだけのお金をつぎ込むかは、その人の問題なので、否定しない」（3年生、女性）

ところで興味深いのは、この意見の持ち主の中には、自身は韓流ブームではなく、ブーム現象などには興味がないという人が多かったことである。これはすなわち、学生の評価は、韓流への評価というより、個々の趣味世界の多様性を尊重しようとする意識に基づく評価である、と考えられる。

ブームにともなう商業活動や観光などによって、両国ともに大きな経済効果が得られたのではないかという見方もあった（11名）。少数意見としては、韓流ブームを、日本社会に活力を与える望ましい社会現象であるという意見、韓国における日本大衆文化開放の促進につながるとする意見などがみられた。

3－2－2　中高年女性のファン行動について―否定的な面

中高年女性のファン行動についての否定的な意見としては、「異常」「騒ぎすぎ」「ついていけない」などと、中高年女性及びメディアの過熱ぶりに対する拒否反応のようなものが多い。テレビのワイドショーに映し出されていた空港やイベント会場などにおける熱狂シーンの印象が強かったようだ26)。否定意見のなかには日本の大衆文化と関連づけ、韓国における日本大衆文化開放にもっと関心を持つべきだとする意見もみられた。また、韓流ブームは表面的な交流に過ぎないと捉え、歴史問題や在日コリアンの問題など、韓日両国の懸案課題により関心を持つべきだとする意見もみられた。

---

25)＜ひととき＞『朝日新聞』（2004年2月19日付）。

26)辻は、「2004年4月来日したペ・ヨンジュンを迎える成田空港での中高年層のファン」という映像の印象が人々の脳裏に刻印され、中心的なファンの年齢層が本来の中年層から中高年層にシフトしてしまったとし、映像のインパクトの強さを指摘しているが（辻,7　8頁）、ファン行動についての認識に関しても同じことが考えられよう。

www.kci.go.kr

では、もっとも指摘が多かった「中高年が騒ぎ過ぎ」だとする意見（16名）からみておこう。

「空港にギャーギャーおしかける姿を見た韓国の方々に日本人の女はみんなああなのかと思われるのも嫌」（2年生、女性）

「日本の韓流イメージが日本のイメージとして世界に植えつけられるかもしれない」（2年生、女性）

「中高年が盛り上がりすぎて、若者が今さら入っていけない感じがする。ワイドショーや雑誌で騒ぎすぎ（中略）見ているとあきる」（4年生、女性）

「男性は韓流ブームではないので、韓国に対する温度差を感じる。それが今の日韓関係を少し象徴していると思う」（4年生、女性）

「周りが見えなくなったかのような中高年女性を見ると、少し悲しくなる」（3年生、女性）

「その熱の入れようはあまりにも異常」（2年生、女性）

つぎに、ドラマ、特に『冬のソナタ』に映る韓国と実際の韓国、つまり虚像と実像を混同しないでほしい、韓国をもっと多様な観点から、深く追求してほしいという意見である（4名）。例えば、韓日関係や歴史問題についても学ぶべきだとする意見である。

「日韓問題を考えずに単純に〝韓国が好きだ〟と言うのは、韓国人にとても不思議な行動に見えるかもしれない。韓流ブームが日韓の交流に良い影響を与えるか否かはペ・ヨンジュンや冬ソナだけが韓国ではないことを確認したうえでだと思う」（2年生、女性）

「韓国スターばかり見ている中年女性が多い（中略）韓国にはもっと他によいところもある」（2年生、女性）

「『冬のソナタ』で見る映像が韓国だと思い込み韓国の一部の情報だけをもとに自分のなかで消化して実際の国を見ようとしない人たちが増えてきたら怖い」（2年生、女性）

ところで、上記のような意見は、韓流ファンへの批判的な見方として決してめずらしくない。それに対し、映画やテレビドラマなど、外国文化に興味を持つ上で、その国の歴史や自国との関係などについての勉強は、意識的に行うべきものであろうか、と疑問を投げる声

www.kci.go.kr

もある。次のある韓流ファンの指摘のように27)、ブームが定着し、韓国の歴史や韓日関係など、文化作品の背景をも総体的に捉えようとする意識や行動が自然に表れるまでは、まだ先を待たなければならないかもしれない。

「何で韓国だけ、とやかく言われなきゃいけないんですか？（中略）別に、そういうことを無視したり知らなくていいと思ったりしているわけじゃない。（中略）結果的に徐々に乗り越えていければという感じじゃないかな。急には無理かもしれないけど、例えば、私たちはそういう親から育っていたとしても、私の子どもなんか、親がもう韓国大好きで、いつもキムチとか食べさせられて（笑）。そういうふうに暮らしていると「私、韓国人と結婚しようかな」とか言ったりします。そういう感覚でいけば、だんだん違っていくんじゃないかな」（40代女性、企業研修、就職指導アドバイザー）

「アメリカに対しても同じように指摘してきたんですか。（中略）単純に、アメリカ文化とかハリウッドにあこがれてきたわけでしょう」（40代女性、パート）

確かに、ある文化作品を好むという情緒的かつ私的な行為に対して、歴史問題や韓日関係など公的なイシューにも意識的に関心を持ち、学習することを求める考えは、いささか趣味の領域を拡大解釈しているような気がする。興味をもった対象からその周辺にまで徐々に関心が広がり、あるいは深まっていくという流れは趣味の世界でよくみられる現象であり、韓流ファンにもその傾向が認められる。韓流ブームが韓日交流へと発展していくとすれば、それは、これまでの公共レベルで進められてきた韓日交流でしばしば指摘されていた問題、つまり、政治や歴史問題などに交流が左右されやすいという課題を克服できる、韓日交流の新たな形を作り上げることになろう。

その他の少数意見としては、家庭や家族のことを考えて行動してほしいという意見や、韓流は韓日交流にとても良いことだとしながらも、現状は「一方通行」であると、日本の大衆文化や俳優にもっと関心を持ってほしいという意見（3名）があった。確かに現状では、韓流に比べ日本ブーム「日流」の勢いが弱いかも知れない。しかし、これについては、「日流」の支持層が若者世代であり、したがって、徐々に浸透していくという傾向をもつことを理解しなければならないだろう。

3－2－3　大学生と韓流ブーム　―「あなたは、いま、韓流ブーム？」

本人と「韓流ブーム」との関係については、37名から回答が得られた。内訳をみると、自分はいま「韓流ブームである」とした人が12名で、「韓流ブームではない」とした人が

27)「特集ペ・ヨンジュン・私たちは、どうなってしまうのでしょう―」,214－223頁。

www.kci.go.kr

25名となっている。韓流ブームが中高年女性を中心とする社会現象であることからすると、若い世代でも韓流ブームに乗っている人が多いように見える。しかし調査対象者が韓国社会論の受講者であること、つまり、韓国に興味を持っている人が相対的に多いと思われる集団特性を考慮すると、ブームである人が必ずしも多いとはいえない。

そこで、回答の記述内容を読んでみると、つぎの2点が特徴として確認できた。ひとつは、韓流「ブーム」と韓国への「興味」を明確に区分していること、いまひとつは、ブームそのものを否定的に捉えていることである。ブームに乗ったのではない、あるいは日本での韓流ブームが起こる前から韓流が好きだったので、一緒にされたくない、ということである。

そこで回答の記述内容をみると、現在、「ブームではない」と答えた25名のうち「まったく興味ない」と記述したのは12名のみである。残りの13名は韓国映画や音楽、ドラマを楽しんでいて、韓国に興味も持っている。しかし、ブームになる前から楽しんでいる（3名）、韓流だからではなくよい作品だからアクセスしているだけ（5名）、中高年ほど熱心ではない（1名）などの理由で、「自分は、現在韓流ブームではない」と回答している。つまり、韓国の情報や作品が身近で手に入るようになったと喜び、韓流を楽しんでいながらも「本人はブームではない」と考えている人が少なくない。

彼・彼女らは、韓流ブームを、「追っかけ」「さわぐ」「過熱」という修飾語を伴うものとして受け止めているのであろう。だから、韓国の映画やドラマ、音楽が好きで、実際楽しんでいても、ブームではないという結論に至るのである。彼・彼女らが、1990年代半ば以降のマイブームに慣れている世代であることを勘案すると[28]、韓流にハマっている中高年女性を批判することもなければ、自身がブームに乗る可能性も低いことは当然予想される。街にあふれる韓国の情報や商品など、ブームの波及効果を上手に利用はするが、自分が韓流ブームだとは思わないのである。流行を追うより、個人の多様な選択による「好き」を尊重するマイブームの世代であるにもかかわらず[29]、少数ながら「ブームである」という回答が得られたことにむしろ注目すべきであろう。

「〔ブームになる前に〕『冬ソナ』をみたときは、とても夢中になったし、感動した。（中略）おばさんファンがさわぐのはかなり"異常"（中略）それをみると逆に韓流のものをみてみたいとは思わなくなった」（3年生、女性）

「韓流ブームではない。でも韓国の映画や音楽は好き。（中略）韓国に近づけたの

28)漫画家でイラストレーターのみうら・じゅん（本名：三浦　純）による造語であり、「自分の中だけではやっている物や出来事」といった意味で使用される。1997年に新語・流行語大賞を受賞したが、マスコミでも広く使われており、受賞後も廃れることなく使用され続けている。同賞を受賞した言葉が一般にまで広く使われることは少ないという現状に照らして考えると、「マイブーム」そのものが高い支持を得ていることがわかる（「ウィキペディア（Wikipedia）」）。

29)김지룡, 48-49頁。

www.kci.go.kr

はこういう映画や音楽だし、韓国に行ってみたいとすごく思う」（3年生、女性）

「［韓流ブームとは］違う。"熱"はない。しかし、韓国映画・ドラマとは韓流ブームのおかげで出会えたと思う。（中略）韓流の良さに気づかせてくれた日本の中高年に感謝しなきゃと思う。」（3年生、女性）

「ブームにのっていたといえますが、中高年の女性たちの姿を見て、少し引いたところがある。（中略）今は、表面的な理解は大体できてきたと思うので（中略）韓国人との長期的な交流の中で理解を深めていきたい」（2年生、女性）

「韓流ブーム以前から韓国に興味があったので韓流ブームというわけではない。以前から韓国に興味があったのに韓流ブームにのっていると思われたくない」（2年生、女性）

「韓流ブームではない。基本的にブームに乗っかるのは嫌いだ」（4年生、男性）

「全くといっていいほど無関心。韓国映画やドラマは見るし、韓国にも関心はあるが韓流ブームとはまた少し違うと思う。好きなものを見たい時に見る」（2年生、女性）

「ブームではない。が韓国の映画はよく見る。それはアメリカやイギリスの映画を見るのと同じような感覚」（2年生、女性）

つぎに、「ブームである」と記述した場合でも、ドラマより映画や音楽を楽しんでいる人が多い。また、韓国人の友達ともっと仲良くなるために、あるいは語学勉強のために多様なジャンルの韓流を楽しんでいるという人も多かった。現在韓流ブームだといいながらも、ドラマや観光、特定の俳優に関心が集中している中高年女性の楽しみ方とは異なる、とあえて付け加えている回答者が多い。ちょうど2000年頃から、英語圏あるいは中国などの留学先で友だちになった韓国人ともっと仲良くなりたいから、という理由で韓国語を受講する日本人学生が増えてきたことを思い返すと、中高年女性と大学生の韓流に接する契機やジャンルが異なるのは当たり前のことかも知れない。虚像の世界であるとはいえ、ドラマなどを通じて、中高年女性が韓国の日常に接するようになったことの意義を考えさせる部分である。

「ブームである」という回答のなかで、「追っかけや特定の俳優が好きなわけではない」（2名）、「中高年女性ほど熱心にファン行動をしているわけではないのでブームだろうかと迷う」（1名）と、韓流ブームでの中高年女性の行動と比べてながら回答している人は3名で、残りの9名は自分が楽しんでいる状況を基準に「ブームである」との判断をしている。しかし、韓流に接している状況をみると、前述の、ブームを否定した回答者20名と

www.kci.go.kr

類似している。結局、ブーム、あるいは中高年層のファン行動についての評価が、自分と「韓流ブーム」との関係を判断する基準の一つになっているのである。

「世間でいわれているブームとは、追っかけとか、すごい熱烈なイメージがあるので、私はそういう面から考えるとブームではない。しかし、韓国の食事とか好きだし、映画も見たことがあるので（中略）韓流ブームだと思う」（2年生、女性）

「今少し韓流。（中略）でも、特定の好きな俳優がいるわけではないので、追っかけとかするほどではない」（4年生、女性）

「冬ソナをはじめ数々の韓国ドラマを見ました。もちろん映画もたくさん見ています。きっかけはフレンズのウォンビン（中略）『冬ソナ』では涙を流せることが快感となり他のも見てみたいというきになった」（2年生、女性）

「世間で騒がれるようになる前から。（中略）単に日本人が韓国の文化の魅力に気づくのが韓国人が日本文化の魅力に気づくのに比べておそかっただけだったのではないかと考える」（2年生、女性）

「これだけ韓国のものに接する機会が増えていることに、疑問を持たなくなっている（中略）この現象こそが、自分も知らない間に韓流ブームにまきこまれているということなのかも」（2年生、女性）

以上、韓流ブームについての評価及び自分との関係についての記述内容を総合してみると、大学生は、韓流ブームを、「中高年女性のファン行動に代表される熱狂的なもの」、時期的には、主に「冬ソナ」・「ヨン様」ブーム以降であると考えている。この条件に自分の韓流消費状況を当てはめ、ブームか否かを結論づけているのである。また、中高年のファン行動についても、個人の趣味活動であり、元気な中高年層の「発見」という観点から、一定の評価を与えている。これはマイブーム世代として、趣味の多様性を認める意識からでもあるが、中高年女性の個としての領域を否定しない、さらには尊重しているという点で非常に興味深い結果である。そして、彼・彼女らが、韓流ブームの一番の効果として挙げるのは、日常的に韓国に接する環境が日本の中にできたこと、日本人が韓国を知る契機を提供した、ということである。日本における韓流ブームの定着が韓日交流の土台形成に影響している現状を評価しているのである。

www.kci.go.kr

4．おわりに

本稿では、「冬ソナ」ブームと日本の純愛ブームとの関係、中高年女性のファン行動についての大学生の認識について考察した。「冬ソナ」ブームの背景としては様々な要因が指摘されているが、とりわけ大きな影響を及ぼした要因として日本の純愛ブームを取り上げた。初恋を貫くというテーマを描く『冬のソナタ』は、純愛という時代の感性と合致した作品として高い支持が得られたものと考えられる。若い世代が「セカチュー」や『電車男』に夢中であったように、中高年女性は『冬のソナタ』を通して純愛ブームを満喫していたのである。

ここで注目すべきことは、中高年女性が流行をリードしていること、言い換えると、彼女らが趣味活動を積極的に展開できる状況にいるということであろう。なぜなら、中高年女性の趣味活動には、家族の理解が何より必要であるからだ。また、彼女らが、インターネットの活用や仲間グループでの交流など、きわめて能動的な活動を展開してきたことがブームの拡大につながったのである。韓流ファンの中高年女性の中に、ライフワークのようにファン活動を続けていくという人が少なくない背景でもある。

韓流ブームにおける中高年女性のファン行動に関して、大学生の多くがその過熱ぶりを指摘している。しかしその一方では、「中高年女性」という枠を取り払って、個人の趣味活動の一環として肯定的に評価している。また、韓流ブームを、韓国文化を知る契機として、すなわち、今後の韓日交流のための重要な一歩として位置づけている。特に、これまで韓国との接点が少なかった中高年女性から、韓日交流の動きが始まったことに注目し、韓流ブームが韓日交流につながってほしいという期待もみせている。ある韓流ファンが指摘したように「いますぐでなくても」、韓流ファンの子ども世代になって、韓日両国が相互を「普通」の外国として認識するようになるとしたら、それこそが韓流ブームの成果であるとする認識が、大学生においても共通しているからであろう。

www.kci.go.kr

【参考文献】

권연수(2005),「소비되는 욘사마, 순수와 명품사이」,김영순 · 박지선외『겨울연가 콘텐츠와 콘텍스트 사이』,다할미디어, 345-378頁
김지룡(1998),『나는 일본 문화가 재미있다』,명진출판
문화관광부(2003.12),「2003한국문화산업백서」
변희재(2005.1),「『겨울연가』성공으로부터 얻은 교훈의 의미」,『문화예술』(통권306号),80-83頁
송연옥(2004),「일본의 '한류'바람을 어떻게 볼 것인가」,『문화과학』(2004겨울,통권40호),문화과학사, 170-179頁
윤재식(2007.6.30),「2007 상반기 방송 한류 현황 분석」(KBI포커스 07-13, 통권32호),한국방송영상산업진흥원
李根美（2005.1）,「『욘사마』열풍의 진원지 배용준의 한국팬들」,『月刊朝鮮』,312-319頁
채지영외(2005a),「한류 연구과제 개발을 위한 기초조사」,한국문화관광정책연구원
채지영외(2005b),「일본 한류 소비자 연구-한류 마니아와 일반 소비자의 소비행태를 중심으로-」,한국문화관광정책연구원
安瀬リカ（2005.8.8）,「韓流おにぎり」,『アエラ』（第18巻42号、通巻943号）,朝日新聞社,84頁
井原圭子（2004a）,「東大女子が愛する理由」,『アエラ』（第17巻22号、通巻864号 2004.5.24）,朝日新聞社,18-21頁
井原圭子（2004b）,「『冬ソナ』エグゼクティブ」,『アエラ』（第17巻23号、通巻865号 2004.5.31）,朝日新聞社,76-77頁
小倉紀藏（2004）,『韓国ドラマ、愛の方程式』,ポプラ社
小倉紀藏（2005a）,『韓流インパクト ―ルックコリアと日本の主体化―』,講談社
小倉紀藏（2005b）,「＜純粋なるもの＞への回帰願望 ペ・ヨンジュンという思想」,『論座』(通巻126号, 2005.11）,朝日新聞社,224-229頁
小倉紀藏（2007.7.4）,「韓流は何をもたらしたか」,『民団新聞』,6面
大須美智子（2005.3）,「『冬のソナタ』韓流メロドラマ（３）―アリストテレスから「反解釈」まで―」,『公平』42（２）,88-91頁
小此木雅夫（2005.9.30）,「『壁』は溶けたその先に」,『アエラ 臨時増刊 進化する韓流』（NO.51）,36-37頁
桑畑優香（2007.4.16）,「『韓流は寒流』本当か？」,『アエラ』（第20巻19号、通巻1047号）,朝日新聞社,50頁
杉山麻里子（2004.8.16）,「冬ソナを越えて生きる」,『アエラ』（第17巻37号、通巻879号）,朝日新聞社,12-17頁

www.kci.go.kr

辻竜平（2005）,「沈黙の螺旋としての『冬ソナ』・『韓流』ブーム―誰が語り誰が乗ったか―」,『明治学院大学心理学部付属研究所紀要』(Vol.3),3-14頁
高野悦子・山登義明（2004）,『冬のソナタから考える―私たちと韓国のあいだ―』（岩波ブックレットNo.634）,岩波書店
中沢明子（2003.9.1）,「韓国のベッタベタなドラマ『冬ソナ』」,『アエラ』（第16巻36号、通巻825号）,朝日新聞社,43頁
三島恵美子（2005.7.11）,「韓流はもう古い？台湾F4引っ張る華流」,『アエラ』（第18巻36号通巻937号）朝日新聞社,66頁
三矢恵子（2004.12）,「世論調査からみた『冬ソナ』現象―「冬のソナタ」に関する世論調査から―」,NHK放送文化研究所,『放送研究と調査』（第54巻12号）,NHK出版協会,12-25頁
毛利嘉孝編（2004）,「『冬のソナタ』と能動的ファンの文化実践」,『日式韓流―"冬のソナタ"と日韓大衆文化の現在』,せりか書房,14-50頁
李鳳宇・四方田犬彦（2005）,『パッチギ!対談編―喧嘩、映画、家族、そして韓国―』,朝日新聞社
「特集　ペ・ヨンジュン―私たちは、どうなってしまうのでしょう」,（2005.11）,『論座』(通巻126号),　朝日新聞社,214-223頁
NHK衛星放送局海外ドラマ班編（2006）,『"冬のソナタ"への手紙』,アスコム

＜参考サイト＞

「華流（ファーリュー）」：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8F%AF%E6%B5%81
内閣府大臣官房政府広報室「外交に関する世論調査」(各年度)：
http://www8.cao.go.jp/survey/index-gai.html
「冬のソナタ」放映前に日本で放映されたテレビドラマ：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9F%93%E5%9B%BD%E3%83%89%E3%83%A9%E3%83%9E
マイ・ブーム：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%A4%E3%83%96%E3%83%BC%E3%83%A0
「世界の中心で、愛をさけぶ」：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%AE%E4%B8%AD%E5%BF%83%E3%81%A7%E6%84%9B%E3%82%92%E5%8F%AB%E3%81%B6
「電車男」：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9B%BB%E8%BB%8A%E7%94%B7

www.kci.go.kr

要 旨

日本でなぜ『冬のソナタ』がブームになったのか、大学生は韓流ブームについて、中高年女性のファン行動についてどのような認識を持っているのだろうか、この2点を重点的に考察した。「冬ソナ」ブームが社会現象にまでなった2004年頃、日本は純愛ブームの時代であった。若者の間では純愛物語「セカチュー」が、中高年層では『冬のソナタ』が高い支持を得ていたのである。両者は、世代と対象作品は異なるものの、それぞれが純愛ブームを満喫していたのである。流行と世代という観点からは、中高年女性が流行をリードし、社会全体に影響を及ぼすまでにいたったこと、すなわち中高年女性の顕在化という点で大きな注目を集めた。さらに、インターネット環境の整備がファン行動をいっそう能動的にし、結果的にブームの拡大につながったことも特記に値する。結局、「冬ソナ」ブームは、『冬のソナタ』が当時の日本社会が求めていた感性に合致した作品であったこと、そして、ドラマを積極的に消費する中高年女性がブームの主役であったことから生み出された社会現象といえよう。

大学生の韓流ブームに関する認識調査では、中高年女性のファン行動を肯定的に捉える傾向がみられた。その背景としては、中高年女性の行動を個人の趣味活動の一つとして解釈していることが考えられる。その一方において、韓流ブームは熱狂的なファン行動を伴うもの、ブームに乗るのは好きではない、などの理由から自身が韓流ブームであるか否かについては否定意見が多かった。しかしながら、韓流ブームが、韓国文化を知るきっかけとなったこと、とくにこれまで韓国との接点が薄かった中高年女性がブームの中心に位置していることについては高く評価している。さらに、韓流ブームの結果として、日本において、韓国文化に日常的に接する機会が増えたことについても、肯定的に評価している。

キーワード：「冬ソナ」ブーム、韓流ブーム、純愛ブーム、ファン行動についての評価、中高年女性と大学生、マイブーム

투　　고：2007. 8. 31
1차 심사：2007. 9. 8
2차 심사：2007. 9. 29

住　所：(753-0021) 日本国山口県山口市桜畠3丁目2-1
電　話：81-83-928-3440
e-mail：hwkim@fis.ypu.jp

www.kci.go.kr